

サン・テグジュペリの『人生に意味を』 の内容と解説（II）

加 藤 宏 幸

III. 『平和か戦争か』 *La paix ou la guerre ?*

『パリ・ソワール』紙1938年10月2日、3日、4日号¹⁾

内容 「戦っている人、君は誰か」——「われわれは平和を救うことを選んだ。しかし、平和を救うことによって、友人たちの手足を切断してしまった。おそらく、われわれの多くは、友情の義務を果たすために、命を危険にさらす覚悟をしていた。この人たちは一種の恥辱を味わっている。しかし、平和を犠牲にしたなら、彼らは同じ恥辱を味わうだろう。そのときには、人間 *l'homme* を犠牲にしたことになるからだ。つまりそれは、ヨーロッパの図書館や大聖堂や研究所の取り返しのつかない崩壊を受け入れることになるからだ。伝統を滅ぼすことを受け入れたことになるからであり、世界を灰にすることを受け入れたことになるからだ。だからわれわれの考えは揺れたのである。平和が脅かされているように思うとき、戦争の恥辱を感じる。戦争が免れられたと思うとき、平和の恥辱を感じる」²⁾

「この不安がどこに宿っているか発見するためには、諸事件を高所から把握しなければならぬ。数時間は、ズデーテン *les Sudètes* 問題を忘れなければならない。あまり近くから見ていると、われわれは盲目になってしまう。われわれは、戦争を拒絶すると同時に容認もしているのだから、戦争について少し考えてみなければならない」³⁾

ラジオのスピーカーから、ヒトラーの声が流れていた。ヒトラーの言葉を聞くために集まった人々は、貨車に詰め込まれ、戦争という工場に配置される自分の姿を思い描いていた。動員令が下ったかのようなであった。

人々は皆、戦争によってヨーロッパが崩壊することは知っていた。スペインや中国の爆撃を映画で見ても心を動かすことがない。だが、黒い積雲を太らせているのは、穀物倉の

1) SAINT-EXUPÉRY (Antoine de), *Un sens à la vie (Œuvres complètes de Saint-Exupéry, tome III, Paris, Éd. du Club de l'Honnête Homme, [© 1976], p. 175).*

2) *Ibid.*, pp. 175-176.

3) *Ibid.*, p. 176.

穀物であり、家庭の財宝であり、数世代の遺産であり、燃える子供の肉なのである。

「恐怖の描写をするだけであれば、われわれは正しく戦争に反対することにはならない。しかし、生きることの喜びや無駄な死の非情さについて声高く述べるだけでも、同じように正しく戦争に反対することにはならない。数千年以来、母親の涙について語られて来た。だがその言葉も、息子が死ぬことを妨げ得ないことをしっかりと認めなければならぬ」⁴⁾

「われわれの悩みは、人類のように古い悩みである。悩みは、人間の進歩を支配して来た。社会が進歩すると、人々は時代遅れの言葉という道具を使って、現存する現実を捉えようと一層努力する。承認しようとしまいと、人は言葉とその言葉の伝達するイメージに捕らわれている。少しずつ矛盾して来るのは不十分な言葉であって、決して現実ではない。新しい概念 *un concept nouveau* を作るときに、初めて人間は解放されるのだ」⁵⁾

戦争が不条理で恐ろしいものであることを知りながら、なぜ戦争するのだろうか。戦争の危険は人間の狂気の中に存すると答えたとしても、どのような明晰な言葉でこの狂気を表現し、それから解放されることが出来るだろうか。野性の本能、強欲、血への嗜好にその答えを求めても不十分である。

戦争は不条理なものである。どうしてもどちらかの陣営を選ばなければならない。しかし、もっとも不条理なものは、人々に互いに反対を唱え合うことを余儀なくさせる言葉 *un langage* である。自分の主張の真実の明白さを理由として反対してはいけない。揺るがない真実のコーラン *un Coran* とそこから生じる狂信を引きずって行く分裂は忘れなければならない。戦っている人に向かって、不十分な言葉で自分を正当化するのを聞くことによってではなく、彼が生活しているのを見つめながら、彼が切望しているものを訊ねることにしよう。

「夜、塹壕から塹壕へと、敵対する者が互いに叫び合い、答え合う」——パトロール隊が編成され、野原を横切って進んで行く。その隊は、対立する二つの陣営を分ける狭い谷の底まで降りて行くことが使命だった。サン・テグジュペリは同行した。両軍の砲火を浴びて、前線の村から農民たちは撤退してしまっていた。同行していた政治委員が言った。「最前線に出たら、谷の反対斜面にいる敵に質問してみよう……。時々敵が話しかけてくるんだ……」

完全な沈黙。銃声一つ聞こえない。やっとたどり着いた。そこにいた歩哨が言った。「こ

4) *Ibid.*, p. 181.

5) *Ibid.*, pp. 181—182.

こです。時々彼らが答えてくれます……。時には、彼らの方から呼びかけてくることもあります。……答えないときもあります」。サン・テグジュペリがたばこに火をつけるやいなや、五、六発の弾丸が飛んで来た。兵士は立ち上って、手でメガホンをつくり、力を込めて叫んだ。「アン……ト……ニ……オー！」。叫び声は谷間に反響した。「眠っているのか……」

「眠っているのか……と、向こう岸のこだまが繰り返す……。眠っているのか……と、谷が繰り返す。眠っているのかと夜全体が繰り返す。それがあらゆるものを満たす。そしてわれわれは、異常な信頼をもって立ったままにいる。彼らは発砲しなかった！あちらで彼らは、この人間の声に耳を傾け、声を聞き、受け取っているんだと私は思う」⁶⁾

今度は別の男が叫んだ。「おれはレオンだ……。アントニオー！……」。5秒が経過した。「おおい！」。遠い声がこちら岸に届いた。入り込めなかった闇に突然明かりがともされた。サン・テグジュペリには、目に見えない裂け目が開いたように思えた。こだまが返って来た。「……時間……眠る時間」。「黙れ……。寝ろ……。眠る時間だ」。この連絡に皆興奮していた。

「今われわれは、闇の中で、未知らぬ者に向かってタラップを投げた。今それが、二つの岸を互いに結び付けたのである。今われわれは、敵に殺される前に、敵と結び付いたのである」⁷⁾

兵士が叫んだ。「アントニオ！どんな理想のために戦っているんだ」。告白が届いた。「……スペイン！」。今度は向こうで訊ねた。「……おまえは」。偉大な回答が発せられた。「……おれたちの兄弟のパンだ！」。「……おやすみ、友よ！」。大地の向こう側から答えがあった。「……おやすみ、友よ！」

すべては静寂に戻る。発せられた言葉は異なっていたが、両軍兵士は同じ真実を叫んでいた。しかし、このような気高い一致も、共に死ぬことを妨げてはくれない。

「人生に意味を与えなければならない」——「矛盾した言葉によって、われわれはすべて同じ情熱を表現している。人間の尊厳、兄弟のパン。われわれは、目的に関してではなく、われわれの論理の産物である方法に関して分裂しているのである。われわれは、戦争において互いに敵対し合っているが、同じ約束の地に向かって出発しているのである」⁸⁾

6) *Ibid.*, p. 192.

7) *Ibid.*, p. 196.

8) *Ibid.*, p. 199.

「自分の表現を求める欲求に勝るものは何もない。その欲求が、やむを得ず戦争に導くイデオロギーのうちにこの表現を見出すならば、間違いなくわれわれは戦争をするだろう。われわれは、人間を苦しめる欲求に、戦争とは別なものによってもっとよく答えることができる。しかし、欲求を否定することは空しいことだ」⁹⁾

エル・リフ le Rif 戦争のとき、南モロッコのある将校が、相対峙する二つの山の間にある小さな陣地で指揮を取っていた。ある晩西の山からやって来た軍使たちとお茶を飲んでいたとき、東の山の部族が攻撃して来た。敵の軍使たちは将校の部下に協力し、その陣地を救ってくれたが、休戦交渉はまともならず、軍使たちは帰って行った。軍使たちはまたやって来て、「あなたのために撃った300発の弾丸を返してくれ」と将校に頼んだ。将校は返した。翌日その陣地は攻撃され、その将校は死んだ。人間にとって真実とは、彼を一個の人間にするものである。

メルモーズ Mermoz は1通の手紙を運ぶために、命をかけてアンデス山脈を越えた。山脈を越えているとき、彼の中に人間が生まれたのである。

「献身、危険、死に至るまでの忠誠、これらこそ、人間の高貴さを築くことに大いに貢献した鍛練 des exercices であることを、あなたがたは理解できるのではなからうか。あなたがたがその見本を探せば、郵便機のために自己を犠牲にするパイロットの中に、流行病の患者の額の上にかがみ込む医師の中に、モール人の小隊の先頭に立って、窮乏と孤独に向かって突き進んで行くメハリ（単峰駱駝）に乗る騎兵の中にそれを見い出せるだろう」¹⁰⁾

「われわれがどこかで道を間違えてしまったことが、あなたがたには理解できるのではなからうか。白蟻の巣のような人間の世界は、昔より豊かになっている。われわれは、昔より多くの富と余暇を所有している。しかしながら、うまく明示できない大切な何か欠けている。われわれは、自分を次第に人間と感じなくなって来ている。われわれは、神秘的な特権のある部分を失ってしまったのだ」¹¹⁾

サン・テグジュペリは、カップ・ジュビー Cap Juby に住んでいたとき、羚羊を育てていた。人間の手から草を食べるし、愛撫に身を任せて、掌のくぼみに鼻面を突っ込んで来るので、飼いならされたと思ひ込んでしまう。しかし、小さな角で、砂漠に向かって柵を押す日が来る。羚羊が求めているのは、自らを完成させてくれる空間である。羚羊は本来の羚羊になり、自分の舞踏を舞いたいのである。羚羊の真実が爪の一撃で白中のもとで身を裂かれることにあるとすれば、ジャッカルやライオンが何であろうか。

9) *Ibid.*, p. 200.

10) *Ibid.*, p. 202.

11) *Ibid.*, p. 203.

われわれは、自分を取り巻いている牢獄の壁から解放されたいと願っている。着物が与えられ、食物が与えられ、あらゆる欲求が満たされたとしても、われわれは成長できない。デカルト Descartes やパスカル Pascal やニュートン Newton がしたように精神的に歩み出さなければならない。

われわれを豊かにしてくれる神秘的条件 *des conditions mystérieuses* が存在していることを発見して、われわれは驚く。われわれは、砂漠で最後の食糧を分かち合うとき、言葉では表せない幸福感を覚える。サハラ砂漠に不時着し、飛行機の故障が直ったときの大きな喜びを知った者には、すべての他の喜びは取るに足らないように思える。

「ヨーロッパには、意味を持たず、生まれたいと願っている2億人の人たちがいる。産業が、彼らを農民の血を引く言葉から引き離し、黒い貨車の列で一杯の操車場に似た巨大な特殊地区に閉じ込めてしまった。労働者住宅地の奥から、彼らは目ざめたいと願っている」¹²⁾

「人生に目ざめるためにはどうしなければならないか。自分自身を与えることだ。われわれは、人間は同じイメージを通してのみ他の人間と結び付くことができることを、ぼんやりと感じて来た。パイロットは、同じ郵便機のために闘うならば、一つになることができる。ヒトラー主義者にとっては、ヒトラーに身を捧げることによってである。登山の一行にとっては、同じ頂上を目ざすことによってである。人々は互いに近付いたとしても、結びつくことはない。同じ神の中で混じり合うことによってである。砂漠となった世界の中で、われわれは同士を見出すことに渴望していた。戦友と分け合ったパンの味は、戦争の価値を認めさせた。しかし、同じ目的に向かう前進において、隣の人の肩の暖かさを感じるために、戦争を必要とはしない。戦争はわれわれを欺くものだ。憎悪は、前進の熱情に何も付け加えない。

解放されるためには、われわれを互いに結び付けている目的を意識するよう努めればいいのであるから、その目的を普遍的なもの *l'universel* のうちに探すのがよい。検診する外科医は、聴診する患者のうめき声には耳を傾けない。患者を通して、彼は人間を治そうと努力する。外科医は普遍的な言葉を語る。定期便のパイロットは、筋肉の盛り上がった手首で渦を打ち砕くが、それは苦役である。しかし彼は、闘うことによって、人間関係 *les relations humaines* に奉仕している。この手首の力が、愛し合い、結び付こうとする人々を互いに近付けるのだ。パイロットもまた普遍的なものを取り戻す。星の下で羊の番をする単なる一羊飼いで、自分の役割を意識するならば、自分が羊飼以上のものであることを発見する。彼は歩哨である。歩哨はそれぞれが、全帝国に責任を

12) *Ibid.*, pp. 206–207.

持っている」¹³⁾

「粘土から目覚めて、人類の起源以来われわれが取って来た正しい方向に向かって歩むときに初めて、人間は幸福になるであろう。人生に意味を与えてくれるものは、死にも意味を与えてくれるからだ」¹⁴⁾

解説 論説の背景¹⁵⁾——「ドイツのヒトラーは、1938年3月オーストリアを併合したのち、チェコスロバキアのズデーテン地方のドイツ人の自治権要求を利用して、同国の併合をはかった。対独宥和政策をとるイギリスとフランスは、チェコスロバキア政府に妥協を勧め、9月19日ズデーテン地方のドイツへの割譲を認めさせた。しかし、同地方の即時割譲を求めるヒトラーは、同月23日イギリス首相チェンバレンに『ゴースベルク覚書』を示し、26日には2日の期限つきでチェコスロバキア攻撃を宣言、ヨーロッパは戦争の危険に直面した。27日イギリスはヒトラーの要求を全面的にのみ、翌日イタリアのムッソリーニに列国会議開催の仲介を依頼した。こうして9月29～30日、ミュンヘンでチェンバレン、グラディエ(フランス)、ヒトラー、ムッソリーニの4か国首脳会議が開かれ、ドイツの要求どおり、ズデーテン地方の割譲を10月1～10日に実施することが決定された。イギリスの宥和政策は極点に達し、また脅迫外交の勝利に勢いを得たヒトラーは、翌1939年3月チェコスロバキアを全面的に占領して、第二次世界大戦への道を進んだ」

ミュンヘン協定成立後、フランスに戻ったフランス首相グラディエ Daladier は、相互援助条約を結んでいたチェコスロバキアを見捨てたにもかかわらず、戦争を回避したとして、歓呼の声で迎えられた。平和と交換にヒトラーに屈服したグラディエのとった態度を認めず、ヒトラーに対する徹底抗戦を主張した人たちが少なからずいた。「パリ・スワール」紙は、サン・テグジュペリに対して、このような危機に対する彼の見解を発表するよう求めた。それで彼は、『平和か戦争か』という表題で、彼の見解を発表した。

第一の論説は「戦っている人、君は誰か」と題されているが、その質問に対する答えはない。フランス人が平和を選んだことによって、フランス人はチェコスロバキアの民衆の友情を裏切ったことになるが、サン・テグジュペリは平和を選んだことは正当であると一応認めている。平和を犠牲にして戦争を選んだとしたら、人間を犠牲にすることになるからであった。その場合には、ヨーロッパの図書館や大聖堂や研究所の崩壊を、伝統を、世

13) *Ibid.*, pp. 208—209.

14) *Ibid.*, p. 210.

15) 論説の背景の説明は、『学芸百科事典エポカ』(第17巻、旺文社、171ページ)の「ミュンヘンかいぎ」から引用。

界を灰にすることを受け入れることになるからであった。

しかしながら、チェコスロバキアに対する友情を裏切ることでもまた、人間を犠牲にすることになるのではなからうか。エリック・デショッドは、友情と人間との関係について次のように述べている。「避けることが不可能であったこの戦争でサン・テグジュペリが死んでから今日で40年近くになるが、1938年10月に彼が友情と人間との間に設けた区分は無分別であるように思える。友情なしに人間は存在し得るのか。どうして友情と人間を分けるのか。友愛に関する感動的なたくさんの文章を書いたこの作家が、この日の『パリ・スワール』紙に、同盟関係を結んでいた一国家を放棄することは、人間と同時に友情をも犠牲にすることであり、要するにプラハ Prague の民衆よりも、自分たちが落ち込んだら立ちの重大ささえ知らないグラディエに拍手喝采したフランス人の方が犠牲者であると書くことが許されなかったと考えたとしたら、彼の精神はかなり混乱していたに違いない」¹⁶⁾

『夜間飛行』*Vol de nuit* (1931) において友情の素晴らしさを説き、また『人間の土地』*Terre des hommes* (1939) において友情の輝かしさを説くことになるサン・テグジュペリが、ためらいがあったにしても、フランスによるチェコスロバキアの放棄をどうして認めたのであろうか。このことを彼はやがて深く後悔することになったのではなからうか。後悔の念を直接述べてはいないが、そのことはその後彼がとった行動によって知ることができるであろう。

サン・テグジュペリは、戦争の恐怖を描写しても、無駄な死の非情さを声高く述べても、息子の死に対して流す母親の涙について語っても、戦争に反対することにはならないと言う。

社会は日々進歩するが、人々は時代遅れの言葉によって現実を捉えようとする。不十分な言葉は少しずつ矛盾して来る。人間が解放されるためには、新しい概念を創造しなければならない。

「矛盾を解決することができなくなったサン・テグジュペリは、新しい概念の上に築かれた新しい言葉 *un langage nouveau* の創造への訴えの中に逃避する。人類のすべての困難は、人間がもはや互いに理解し合わないことから生じているのであり、だから新しい理解 *une nouvelle compréhension* を創造しなければならない、と彼は断言する」¹⁷⁾

新しい言葉の創造には長い時間を要するし、またそれは理想にすぎない。ヒトラーがチェコスロバキアを侵略しようとしている事態を前にして、サン・テグジュペリはなんて呑気なことを言っているのだろうか。

16) DESCHODT (Eric), *Saint-Exupéry, biographie*, J.-C. Lattès, [© 1980], p. 256.

17) *Ibid.*, p. 256.

第二の論説「夜、塹壕から塹壕へと、敵対する者が互いに叫び合い、答え合う」は、スペイン戦争中、峡谷に降りて行った敵対する二つのパトロール隊が、夜に交わす対話の話である。サン・テグジュペリがたばこに火を付けると、五、六発の弾丸が飛んで来る。しかしながら、1人の兵士が「アントニオ！」と叫ぶと、敵が「おおい！」と返事する。さらに、「黙れ。寝ろ。眠る時間だ」と返事する。「アントニオ！どんな理想のために戦っているんだ」と叫ぶと、敵は「スペイン！」と答える。敵が「おまえは」と質問して来ると、こちらの兵士が「おれたちの兄弟のパンだ！」と答える。

「パンのないスペインとは何であろうか。祖国のない兄弟とは何であろうか。殺し合っているこの人たちの意見は一致している。彼らには、そのようなことを知ることだけが欠けているのである。だが、言葉が欠如している。共通の理解 *la compréhension universelle* をもたらず言葉を創造しなければならない」¹⁸⁾

第二の論説は、第一の論説で示したサン・テグジュペリの考えを、スペイン戦争に参加したときに彼自身が体験した事実を述べることによって具体化したものである。人間相互の不理解が人間を分裂させる。人間は互いに対立した信念を持っていても、言葉を手段として理解し合える。これは、まさしく第一の論説において、サン・テグジュペリが提示した考えである。しかしこのような彼の考えは、当時のヨーロッパの現実を前にしては、あまりにも抽象的であり、あまりにも理想的である。現実の政治的状況を考慮に入れず、言葉を通しての人間の相互理解は可能であると信じ続けるサン・テグジュペリは、理想主義者でしかない。

「地上の間近から見れば、あんなにも細分化されている大地ではあるが、1万メートル上空から見ればただの一つである。人類が高度を増せば、人類の救いは不可能ではない」¹⁹⁾ これこそが、サン・テグジュペリの考えである。

第三の論説「人生に意味を与えなければならない」において、サン・テグジュペリは、自分の表現を求める欲求に、戦争とは別なものによって答えることができる、と論じ、その欲求に答えた実例を提示する。

エル・リフ戦争において、敵方に300発の弾丸を返却し、その弾丸に当って倒れるある陣地の将校の話。郵便機を操縦し、1通の手紙のためにアンデス山脈のチリ側の斜面に飛び込んで行くメルモーズの話。カップ・ジュビーで、完全に飼いならしたと思っていた羚羊が、砂漠の自由な空間を求めて柵を何度も突く話。バルセロナのアナーキストの地下壕に

18) *Ibid.*, p. 257.

19) *Ibid.*, p. 257.

入り、命を捧げるとき、自分の内に未知の存在が目覚めるのを感じる男の話。母親が死んでも、母親が持ち続けて来たものを維持しようと決心する、母親の死を見守る3人の息子の話。

サン・テグジュペリは、自分の表現を求める欲求を戦争によって満たすべきではなく、他のものによって満たすべきだとして、上に述べたような例を挙げたが、ここにおいても彼の主張はあまりにも理想的すぎる。彼がこの論説を書いた1年後には第二次世界大戦が勃発し、4千万の死者を生み出すことになった。サン・テグジュペリの主張は、戦争の回避に何ら役立たなかった。しかし、誰も彼の主張を非難はしない。多くの場合、政治の現実を前にして、文学者の主張はあまりにも弱く、無視されるのが常だからである。サン・テグジュペリは、この論説における彼の主張に反して、自分の表現を求める欲求を戦争によって満たさざるを得なくなる。

クロード・レナールは、『人生に意味を』の「序文」において、『平和か戦争か』について、次のように述べている。「現在の争いが世界的大混乱への前触れであることを見抜きながらも、この争いを通して絶望的に友愛の証を求め続けるサン・テグジュペリの姿がこの作品の中に発見できる。敵対する双方が闇の中で、塹壕から塹壕へと呼び合い答え合うスペイン戦争の思い出に基づいて書かれたエピソードにも、彼の同じ姿勢を認めることができる。アンドレ・マルロー André Malraux も同じ苦悩と闘い、その苦悩を『希望』 *L'Espoir* の中に表現した。『平和か戦争か』を構成する三つの章の最後のもの、『人生に意味を与えなければならない』はもっとも感動的である。ここには、『X 将軍への手紙』の主題、戦争に対するサン・テグジュペリの恐怖、人間をロボットに変え、人間から思考する時間さえ奪ってしまう時代に生きる悲しみが見い出せる。このような観念のいくつか、矛盾、羊飼、歩哨、農民の観念は、『城砦』において再び取り上げられることになるだろう」²⁰⁾

IV. 『操縦士と自然の力』 *Le pilote et les puissances naturelles*

「サン・テグジュペリは、コモドロ・リバダビア Comodoro-Rivadavia とプンタ・アレナス Punta Arenas 間の航空路の最後の一部の開発を委任されていた。自ら数回の調査飛行を行い、コモドロ・リバダビア——サン・ジュリアン San-Julian——プンタ・アレナス航空路と、トレレウ Trelew——バイア・ブランカ Bahia-Blanca 航空路の基礎を築いた。パセッコ Pacheco 空港を視察したのち、ラテ Laté26型機に乗って、サン・テグジュペリは、南米最南端に最初の調査飛行を行った。ホーン岬 le Cap Horn からマジェラン海峡 le détroit de Magellan に向かって吹くパタゴニア Patagonie 地方のサイクロンとの闘い

20) Saint-Exupéry, *op. cit.*, p. 47.

をサン・テグジュペリが物語っているこの物語は、コンラッド Conrad の『台風』 *Typhon* に比較された。／「マリアンヌ」紙，1939年8月16日，第356号参照²¹⁾

内容 サン・テグジュペリは、パタゴニアのコモドロ・リバダビアに向かってトレレウの基地を飛び立った。大太平洋の高気圧から大西洋へ向かって吹く風は、アンデス山脈の谷間を通るとき、締め付けられ、速度を増し、すべてを削り取る。厳しい太陽が、擦り切れた大地の上に輝いていた。

ついに機体が震動した。翼は嵐の前触れを受け取っていた。やがて、激しい風を受けて前進できなくなった。風景は少しずつ動かなくなり、完全に止まってしまった。飛行機は横滑りを始め、大地へ向かって吸い込まれて行った。谷間に突っ込んだが、動揺は一層激しくなり、飛行機をほとんどコントロールできなくなった。新たな疾風が飛行機を4分の1回転させたり、後向きにさせたりするので、一定位置に留まることができない。海に出なければならない。

サン・テグジュペリは、風と闘っているのではなく、尾根や山頂や岩と闘っていることを発見する。前方右手に、サラマンカ *Salamanque* の鋭峰が認められた。鋭峰から吹き下ろす風の下を通り過ぎれば、海に出られる。飛行機全体が震動し、500メートルも持ち上げられる。広々とした大洋が、突然姿を現す。谷間を吹く風によって、海岸から10キロメートルも押し出されてしまう。吹き下ろす風の力で、水面すれすれまで押し下げられる。エンジンを全開にして、時速240キロメートルのスピードを出したが、前進しない。

定期航空路を4年間飛んで来て初めて、サン・テグジュペリは、翼の耐久力を疑った。海に激しくぶつかるのもこわかったし、ガソリンがなくなり海に沈むのもこわかった。絶望的だと思った。20分間闘ったが、100メートルも前進しなかった。恐怖は感せず、機首を立て直すことしか頭になかった。

上昇を試みたが、足をすくわれたように、ひっくり返った。空は、踏み留まることができないドームのように思えた。

自分自身の手にとどのようにして命令を伝えたらよいだらう。手はしびれて、死んでいる。操縦桿に伝わって来た不規則な震動を弱めるために、操縦桿にしがみついていたからであった。彼の手は他人の手同然であったが、無意識に操縦桿を握っている。操縦桿を放せば、海へ墜落するだろう。

ポンプが停止した。終わりだ。また動き出した。汗でびしょ濡れになる。バッテリーが鋼鉄の輪金をもぎ取り、床にぶつかり穴をあける。翼の助材もはがれ、数本の操縦索は、

21) *Ibid.*, p. 215.

最後の1本になるまで擦り切れてしまう。

1時間20分の闘いののち、300メートルの上昇に成功した。少し南の海上に、青い川のようなものが認められた。そこに行けば海岸に向かってさかのぼれると思ったので、左の方へ流されて行った。

10キロメートル進むのに1時間を要した。絶壁に守られて、南の方へ降りて行った。高度300メートルを維持するのに成功した。猛烈な風は止んだ。

飛行機場に着陸した。彼を救助するために、120人の兵士が呼び集められていた。友人たちには何も答えなかった。あれほど遠いところから戻って来たのだから、あの出来事について語らねばならないだろう。でも、形容詞をいくら重ねても伝えることはできない。片言では何も伝えることはできない。伝えられるようなものが何もないから、何も伝えられないのである。サラマンカの鋭峰を尊重しただけであった。それがすべてであって、ドラマはない。

解説 サン・テグジュペリは、この作品の初めで次のように述べている。

「私がこれから物語るサイクロンは、その猛烈さにおいては、私に体験することが許されたものの中で、もっとも驚くべきものであった。しかしながら、ある期間が過ぎてしまうと、大きな言葉を積み重ねなければ、もはや渦巻く風の猛烈さを描写できなくなってしまふ。大きな言葉は、感じの悪い誇張趣味を目立たせるだけで、もはや本質的なことは何も伝えない。

私は次第に、この無力感の深い原因を理解できるようになった。存在しなかったドラマを描写しようとするからである。恐怖の喚起に失敗するのは、記憶をよみがえらせながら、事後になって恐怖を作り出したからである。恐怖が、現実の場で示されていないのである。

それ故私は、私が体験した自然の力の反乱の物語を書くにあたって、その本質を伝えられるドラマを書けるような気がしない²²⁾

この文には、体験した出来事を物語るときに、サン・テグジュペリが用いる手法が説明されている。一般に人は、遭難とか事故などの出来事、そのときに感じた感情、特に恐怖を物語る場合、どうしても大きな言葉を使用して表現する傾向がある。誇張した表現を使用すればかえって読者に事実の本質は伝わらず、事実の真実も伝わらない。それ故サン・テグジュペリは、体験を物語るとき、極力誇張した表現を排除して、そのとき存在したものの、そのときに感じたものをありのままに物語ろうと努力する。

22) *Ibid.*, p. 218.

トレレウの飛行場を飛び立ち、コモドロ・リバグビアに向かっていたとき、サン・テグジュペリは、アンデス山脈を越えて大平洋から大西洋へと吹き抜ける時速240キロメートルのサイクロンに巻き込まれた。アンデス山脈の峰々の間を縫いながら飛び、ついには海上に流されてしまう。手がしびれて無感覚になったにもかかわらず、操縦桿を握り続け、ついに飛行場に着陸する。

サン・テグジュペリは、自ら体験したこの事実を、自分の感情を混えず、大きな言葉も使用せず、事実だけを単々と物語っている。このために、われわれ読者は、アンデス山脈の荒々しい山肌、その恐ろしい鋭峰、サイクロンの激しさ、猛烈な風によって白く波立つ海を眼前に見ることができるし、サイクロンに立ち向かうサン・テグジュペリの必死の努力を感じとることができる。「自然の力の反乱」が的確に捉えられた作品である。

V. 『フランス人への手紙』 *Lettre aux Français*

「北アフリカへの英米連合軍の上陸と、ドイツ軍によるフランス南部地帯占領直後、1942年11月30日、サン・テグジュペリは、モントリオール Montréal の『カナダ』 *Canada* 紙に、全フランス人の団結の必要を説く立派な論説を発表した。英訳されたこの論説は、その前日に、リュード Rude の『ラ・マルセイエーズ』の口絵とともに、『ニューヨーク・タイムズ・マガジン』 *New York Times Magazine* に発表されていた。それは急いで書かれた訴えて、フランス語放送を有するすべてのアメリカのラジオ局によって放送され、その一部は、北アフリカの新聞に転載された。／『ニューヨーク・タイムズ・マガジン』、1942年11月29日号、『プール・ラ・ヴィクトワール』 *Pour la Victoire* 紙、1942年12月19日号参照」²³⁾

内容 まずサン・テグジュペリは、フランスの置かれた状況について説明する。

「ドイツの夜が、祖国を埋もれさせてしまった。今まではわれわれは、愛する人たちについて何かを知ることができた。今までは、彼らのテーブルの粗末なパンを分け合うことができなくとも、彼らにわれわれの愛情を伝えることができた。遠くからであつても、彼らの呼吸音を聞くことができた。すべては終わった。フランスは、もはや沈黙にしかすぎない。船のように、すべての灯を消して、闇の中のどこかに見失われてしまった。フランスの良心も、その精神生活も、闇の厚い壁の中に身を縮めてしまった。われわれは、明日ドイツが銃殺する人質の名前さえ知らない」²⁴⁾

つづいてサン・テグジュペリは、外国にいるフランス人の立場とフランスにいるフラン

23) *Ibid.*, p. 237.

24) *Ibid.*, p. 239.

ス人の立場を比較して、次のように述べる。

「われわれはフランスを代表してはいない。奉仕することしかできない。われわれがどんなことをしたとしても、いかなる感謝も受ける権利はない。自由な戦いと闇の中の圧迫の間には、いかなる共通点もない。兵士の仕事と人質の仕事の間には、いかなる共通点もない。かなたのフランス人こそ、真の聖者である。次の戦いに参加する光栄を持つことになったとしても、われわれはまだ負債を負っている。われわれは一箱の借金にすぎない。まず第一に、それこそが基本的事実である」²⁵⁾

そしてサン・テグジュペリは、論争を止め、一致団結してフランスに奉仕しようと呼びかける。

外国に住むフランス人は、フランスとドイツとの協調精神を非難して来た。ある者はフランスの裏切りを非難し、他の者はフランスの振る舞いはドイツの恐喝の結果であると判断した。フランスを非難している間に、食料の引き渡しが4分の1に削られ、さらに10万の子供たちが6カ月の間に死んで行った。

休戦条約を破棄したとすれば、再び戦争状態になったであろう。占領軍は6百万の成年を捕虜にし、根絶したかもしれない。どのように抵抗できたか判断することができる人がいるだろうか。

連合軍はドイツ軍を打ち破り、北アフリカを制圧した。その勝利は、部分的には50万の子供の犠牲によって獲得された。フランス人は意見の相違を解消し、団結しなければならない。ナチスの恐喝については意見の相違はないのだから。

失効した政府の真の意図に関してのさまざまな意見のために、どうして憎悪し合わなければならないのか。ヴィシー Vichy 政権が死んだのだから、論争の対象はない。ドイツ軍によるフランスの完全な占領は、あらゆる論争を解決した。党派心を捨て、和解しよう。

「われわれが身を捧げることを望んでいるかどうか知る必要はもはやない。秤を傾けるために、一方の皿にわれわれ全員が座ることが要請されている」²⁶⁾

「真の指導者は、沈黙を強いられたフランスである。党派、徒党、分派を憎もう」²⁷⁾

ド・ゴール de Gaulle 将軍とジロー Giraud 将軍の権力争いはどうでもよい。2人とも祖国に奉仕しているのだから。

今日まで黙り通して来たフランス人は、國務長官コーデル・ハル Cordelle Hull 氏に表明すべきである。合衆国の全フランス人は動員を希望していると。

「フランス人諸君、和解しよう。われわれが爆撃機に乗り、五、六機のメッサーシュ

25) *Ibid.*, p. 240.

26) *Ibid.*, p. 244.

27) *Ibid.*, p. 246.

ミット Messerschmitt と戦っているとき、われわれは古い論争を馬鹿らしく思うだろう」²⁸⁾

解説 サン・テグジュペリは、この訴えにおいて、まずフランス全土がドイツに占領され、フランスに住む人たちの消息を知ることが不可能になってしまった現状を説明し、つづいて、真に戦っているのは人質になっているフランス人であると断言する。

サン・テグジュペリは、フランス人がドイツと休戦条約を締結したことはしかたがないことであり、そのことを非難すべきではないと考える。休戦条約を破棄したとすれば、再び戦争状態となり、6百万の成年が根絶されたかもしれない。

ナチス・ドイツに抵抗することでは意見が一致しているのであるから、外国に住むフランス人は団結しなければならぬと説く。真の指導者は沈黙を強いられたフランス人である。ド・ゴール將軍とジロー將軍の権力争いなどどうでもよい。合衆国の全フランス人は動員を願っていると表明すべきである。

格調高い和解と友愛への訴えである。しかし、この訴えには寛大すぎる点があり、容易には受け入れられなかった。フランスとドイツとの休戦条約の承認、ヴィシー政府の方針の承認は、多くの人たちには受け入れ難いものであった。サン・テグジュペリをファシスト呼ばわりする人たちがさえ現われた。特にド・ゴール派の人たちの非難が激しかった。彼らにとっては、サン・テグジュペリが、ド・ゴール將軍とジロー將軍を同列に置いたことも耐え難いことであった。

サン・テグジュペリは、一部の人たちから激しい非難を浴びたが、外国に住むフランス人の和解を訴え続けた。1943年2月に刊行された『ある人質への手紙』*Lettre à un otage* における和解への訴えはより感動的である。

VI. 『X 將軍への手紙』 *Lettre au général X*

「1943年7月、チュニス Tunis 近郊ラ・マルサ La Marsa で書かれた。／『ル・フィガロ・リテレール』*Le Figaro littéraire* 紙、1948年4月10日、第103号参照」²⁹⁾

内容 43歳になった今、サン・テグジュペリが高速度の飛行機P38に乗っているのは、昔の満足感を再び見出し出そうとする希望からではなく、自分の時代の困難を拒否しないためである。

今彼はアメリカ軍の基地にいる。立ったままで10分ですませる食事、各室に3人ずつ詰

28) *Ibid.*, p. 247.

29) *Ibid.*, p. 249.

め込まれているあばら屋，単座機から単座機への往復，これこそ恐るべき人間の砂漠である。

「今私はとても悲しい——心の奥底まで悲しい。人間の実質が全くない時代が悲しい。〔…………〕すべての叙情は愚かしく鳴り響き，人々はいかなる精神生活に目覚めることも拒否する。彼らは鎖につながれて，正直に仕事らしきものをしている。〔…………〕広告と，ブドー Bedeaux 方式（労働合理化方式）と，全体主義政体と，ラッパも軍旗も戦死者へのミスもない時代。私は心からこの時代を憎む。人間は，ここでは渴きで死ぬのである」³⁰⁾

サン・テグジュペリは，将軍に向かって語りかける。

「世界中にただ一つの問題しか存在しない。人間に精神的意味，精神的不安を返すことである。〔…………〕人間は，デカルトの価値観を適用しようと試みた。自然科学以外には，それは成功しなかった。ただ一つの問題しかない。知性の生活よりずっと高貴な精神の生活が存在することを再発見することである。精神の生活こそ，人間を満足させてくれる唯一のものである」³¹⁾

ドイツの問題が解決するとき，あらゆる真の問題が生じるであろう。強力な思潮がないので，互いに異なるたくさんの宗派が生まれるであろう。今日の人間を人や事物に結び付けている愛情の絆はびんと張られていないし，密でもないので，人間は絆の存在をもはや感じない。人間は，何に対して不誠実なのか分からなくなってしまっている。人間の砂漠である。

「私は，世界的な全体主義のもとで，人間がおとなしい，礼儀正しい，静かな家畜となっていくこの時代を憎む。〔…………〕いかなる創造力も取り除かれ，村の踊りも歌も生み出すことさえもはやできなくなった人間。干し草で牛が育てられるように，既製品の文化と規格品の文化で養われる人間。これこそ，今日の人間の姿である」³²⁾

ドイツの敗北後に，われわれの時代の問題である根本的問題が生じるであろう。人間の意味についての問題であり，それに対する答えは見い出されないだろう。世の中は，もっとも暗い時代に向かって進んで行く。

「戦争で殺されようと，私はかまわない。〔…………〕しかし，もし私がこの『必要だがむなしい仕事』 *job nécessaire et ingrat* から生きて帰れるならば，私にとって一つの問題が提出されるだろう。人間に対して何をすることができ，何を言わなければならないか」³³⁾

30) *Ibid.*, pp. 252—254.

31) *Ibid.*, p. 254.

32) *Ibid.*, pp. 257—258.

33) *Ibid.*, p. 259.

解説 外国に住むフランス人の和解と団結を訴えた『フランス人への手紙』の中で彼らに提案した戦いへの参加を率先して実行するために、サン・テグジュペリは、1943年3月、民間人の乗船が許可された最初の護送船で、ニューヨークから北アフリカに向かった。5月にアルジェリアに着いた彼は、ただちに彼が以前に所属していた2/33飛行大隊に配属されるために奔走した。42歳であり、規定に定められた従軍パイロットの年齢をはるかに越えていたにもかかわらず、合衆国大統領の息子エリオット・ルーズヴェルト大佐 le colonel Eliot Roosevelt のとりなしにより、アメリカ指揮下にあった2/33飛行大隊に復帰することができた。

飛行大隊は、すでに大太平洋戦争で目覚ましい働きをしていたライトニング Lightning 型機で装備されていた。年齢上の理由から、人々はサン・テグジュペリにこの一機を委ねることをちゅうちょした。彼はあらゆる関係者を動かして、ライトニング型機で訓練されるべき飛行士の名簿に記載されることに成功した。数週間の訓練を受け後、ドイツ占領下のフランスへの偵察飛行に従事した。

時速700キロメートル、上昇高度1万メートル、200近い計器を備えたこの飛行機に乗り、何度か飛行した。

「素晴らしい飛行機だ。20歳のときにこの贈物を使えたら幸せだったろう。世界の空を約6500時間飛行して、43歳になった今になって、この楽しみに大きな喜びを見い出せなくなったことを確認するのはわびしい」³⁴⁾

アメリカ軍基地における集団生活は、1939年9月から1940年8月までサン・テグジュペリが所属していた2/33飛行大隊における、互いに友愛によって堅く結ばれた集団生活とは全く異なっていた。各室に3人ずつ詰め込まれたあばら家、10分ですませる食事、単座機から単座機への往復、それは恐るべき人間の砂漠であった。

このような時期に書かれたのが、『X将軍への手紙』である。サン・テグジュペリは、アメリカ軍基地で感じた人間的なものが欠けているという感情から出発して、人間的なものはこの時代にこそ欠けているのだ、と言うに至る。人々は命ぜられた仕事を正直にはしているが、精神生活に目覚めようとはしない。彼は、「私は心からこの時代を憎む」と断言する。この作品には、彼の人間へのそして時代への悲観的見方が濃く示されている。

しかし彼は、絶望することなく将軍に向かって叫ぶ。人間に、精神的意味、精神的不安を返さなければならない。知性の生活よりずっと高貴な精神の生活が存在することを再発見しなければならない。

34) *Ibid.*, p. 251.

彼の叫びはむなしく響く。彼は、人間を精神の生活へ目覚めさせることは不可能ではないかと思う。人間は、何に対して不誠実なのかさえ分からなくなっている。世界的な全体主義のもとで、人間はおとなしい家畜となって行く。人間は創造力を失い、既製品の文化と規格品の文化で養われている。世の中は、もっとも暗い時代に向かっている。

『フランス人への手紙』で、サン・テグジュペリは、外国に住むフランス人に対して和解と団結を訴えたが、ド・ゴール派の人々からファシスト呼ばわりさえされた。翌年ドイツとの戦いに参加する意思をもって、北アフリカに来た。アメリカ軍基地での集団生活は耐え難く、そこに人間の砂漠を見た。そしてついには、時代にも世の中にも人間の砂漠を見るに至った。

この作品には、時代に人間に絶望したサン・テグジュペリの姿を見ることができる。しかし一方では、生還できるなら、人間に対して何かをし、何かを言わなければならないと述べている言葉の中に、絶望を乗り越えようとする懸命な努力を認めることができる。

VII. 『平和のための弁論』 *Un plaidoyer pour la paix*

『『ニューヨーク・タイムズ』 *New York Times* 紙, 1945年4月22日号参照]³⁵⁾

「映画俳優でありフランスの愛国者であるシャルル・ボワイエ Charles Boyer は、昨日、コロンビア放送網を通じて、飛行家であり小説家である同国人アントワーヌ・ド・サン・テグジュペリのエッセイの一部を朗読し、米仏間の友愛について嘆願した。作者サン・テグジュペリは、このエッセイを書いた直後、前線に向かって飛び立ち、戻ってこなかった」³⁶⁾

このエッセイにおいて、サン・テグジュペリは、アメリカ人の資質を高く評価する。アメリカの青年たちは、この戦争で死んでいる。彼らを裏切ってはいけない。平和をもたらしてくれるのは彼らであり、進歩への彼らの信念によって、その平和を高貴なものとしよう、と叫ぶ。

VIII. 序文集

モーリス・ブルード著『飛行家の偉大と束縛』序文 *Préface au livre de Maurice Bourdet: Grandeur et Servitude de l'aviation* (Corrêa, 1933)

内容 「パイロットという職業の偉大と束縛、モーリス・ブルードはこの書物の中で、その全才能と全心情をかたむけて、それを知らせようと努める。私はここではただ、本質的と思えることについて一言言いたい」³⁷⁾

35) *Ibid.*, p. 261.

36) *Ibid.*, p. 263.

37) *Ibid.*, p. 268.

サン・テグジュペリは、パイロットという職業の偉大さと悲惨さの例をいくつか示す。そして最後に、次のように述べる。

「本質的なものとは？それはおそらく、パイロットという職業がもたらす激しい喜びでも、悲惨でも、危険でもなく、それらが培ってくれる物の見方である。速度を下げ、エンジンを弱め、今パイロットが着陸地に向かって滑って行くとき、人間の悲惨、金の心配、卑劣さ、羨望、怨恨が存在する町を眺めるとき、彼は自分が純粹で、そのようなものの手の届かないところにいると感じる。彼は、悪天候の夜であっても、素直に生きる喜びを味わう」³⁸⁾

アンヌ・モロー・リンドバーグ著『風立ちぬ』序文 *Préface au livre d'Anne Morrow-Lindbergh : Le Vent se lève (Listen ! The Wind , Corrêa, 1939)*

内容 「私はこの書物の序文を書くに当って、あるアメリカのジャーナリストの素晴らしいルポルタージュについての友人の意見を思い出した。彼は次のように言った。『このジャーナリストはよいセンスを持っていて、注釈したり小説化したりせずに、潜水艦の艦長の口から聞いた戦争のエピソードを書き留めた。しばしば、航海日誌の無味乾燥なメモを写し取るだけであった。素材のうしろに身を隠し、自らのうちに作家を眠らせることはまことに正しいことであった。これらの無味乾燥な証言、生の記録から、不思議な詩情と悲壮味が生まれて来るからだ』」³⁹⁾

サン・テグジュペリはこの意見に賛成しない。

「このジャーナリストが、電報的文体で自分の書物を書き、具体的なことしか伝えなかつたとしても、どうでもいい。彼は、現実と彼の表現との間に強制的に介入したのである。彼は素材を選択した——全部を語ったのではないから——そしてその素材に秩序を与えた。彼の秩序でである。生の素材に秩序を与えることによって、彼は自分の建物を建てた」⁴⁰⁾

具体的事実だけでは何も伝わらない。作者の才能によってそれに秩序が与えられるとき、人々に感動を与える書物が誕生する。

アンヌ・リンドバーグの書物は、飛行機による冒険の正直な報告ではない。だから、この書物は美しいのである。彼女は、その心の宇宙から何を引き出したのか。その書物の全体に、かすかな苦惱 *une angoisse très légère* が広がっている。

「彼女は、専門的考察や具体的事実の描写を通して、人間の条件の問題そのものをな

38) *Ibid.*, p. 270.

39) *Ibid.*, p. 271.

40) *Ibid.*, p. 272.

んで見事に感じさせてくれることか！飛行機について書いているのではなく、飛行機を通して書いているのだ」⁴¹⁾

「ドキュマン」紙テストパイロット特集号(1939年8月1日号)序文 *Préface au numéro de la revue Document consacré aux pilotes d'essai*

内容 サン・テグジュペリは、テストパイロットが、技術者の測定器具になってしまうことを恐れている。

「ジャン・マリー・コンティー Jean-Marie Conty は、テストパイロットの素晴らしい存在について語るだろう。しかし彼は、理工科学校学生であった。それで彼は、まもなくテストパイロットは、技術者の測定器具にすぎなくなるだろうと断言するだろう。確かに私もそう思う」⁴²⁾

サン・テグジュペリは、飛行機がたんなる機械ではなく、聴診できる生物であることを願う。

41) *Ibid.*, p. 278.

42) *Ibid.*, p. 281.